慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	実際運動の視知覚的変容
Sub Title	
Author	鷲見, 成正(Sumi, Shigemasa)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1977
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.17 (1977.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000017-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

述されたものである．また子守学校と女工学級の連関をも社会経済的な視点からとらえている．

また，国家主義・資本主義・近代化の進行のなかで，教育から遠ざけられた学齢女子のための子守学校・女工学級の成立は，それ自体，彼女らを犠牲とすることによってはじめて可能であった教育制度に対する批判であり，かつ消極的な抵抗であったこと，また，貧しい教育のなかにも人間の解放，教育への目覚めをもたらすものがあること—こうした問題もまた神津論文の主題の根底に秘められている重要な思想史的問題があるが，その背景となる諸事実もまた，この論文に鮮明に展開されている．

なお，学齢外就学者中の6歳以下就学者，および子守学校の幼児の教育問題と，幼稚園との関係，14歳以上就学者と実業補習教育の関係，長野県における自由民権運動の教育問題における思想的裏付けと教育解放の実践における限界などの指摘も，とくにそれが地方教育史の実証的研究の背景の上に行われている点で，神津論文の一つの特徴と算えることができる．

以上のように，神津論文は，近代教育史研究における未開拓の分野を開発し，とくに不就学者・不完全就学者の実態を明らかにしたものとして，学界へのすぐれた寄与の一つに数えることができる．また，県段階における地方教育行政の研究としても新しい研究であると評価することができる．

したがって，この論文は，筆者が十分に教育学博士の学位を授与されるに値いすることを示すものと認められる．

博　士（甲）

文学博士

第478号　鷲見　成正　昭和51年9月24日

「実際運動の視知覚的変容」

論文審査担当者

主　査	慶應義塾大学文学部教授 大学院社会学研究科委員	文学博士 小川　隆
副　査	同	文学博士 印東太郎
	同大学経済学部教授	文学博士 金子秀彬

論文審査の要旨

運動視に関する実験心理学的研究は今世紀初頭，仮現運動についてのゲシタルト心理学を中心にした活発な報告がなされてから久しいが，実際運動，殊に運動軌道に関する報告は比較的少かった．近来，実際運動について速度視と軌道視との両面の研究について関心が高まって来た．本研究は実際運動の軌道視を組織的に扱ったものである．

論文は第1章　問題の提起と方向づけ，第2章　絶対的移動の知覚，第3章　相対的移動の知覚，第4章　総括的考察の諸部分から構成されている．

第1章では従来の運動視研究が概観され，それらの立場が視覚的機能に記述の系を求めるものと視空間の動力学的過程に記述の系を求めるものとの2つの流れとして把握されることが述べられる．視覚的機能については網膜面に対する像の変位，像自体の内部の相互の変位を記述する‘像—網膜系’と眼球の運動による網膜像の変位と眼球運動を指令する頭部中枢からの指令情報コピーとの相対的関係を記述する‘眼—頭部系’との選択が課題となり，また，視空間の動力学的過程については運動対象相互の動力学的過程に注目する記述が次第に運動空間の関係系の成立に関する記述に展開した点が指摘されている．

第2章では実験に入り，暗室内に単一運動光点を提示し，それの凝視追跡中に生じる視的軌道の弯曲が吟味される．軌道の弯曲は実際の運動路が連続，不連続何れであっても成立するが，運動の持続時間，休止時間などの時間的条件に大きく影響されること，また運動路の方向によっても変ることが確められ（実験1），運動開始後，一定間隔で運動出発点，軌道中間点，運動消失点でそれぞれ異った変位とそれの生じる時間的経過が明らかにされ，これらの事実から軌道の弯曲が眼球の飛越運動でなく滑動運動にもとづくことが指摘される（実験2，3，）．結果の考察から絶対的移動の知覚の記述が‘眼—頭部系’の視覚機能に求められる点が述べられる．

第3章では多数個の運動光点の視的様態が実験される．先づ2光点の等速運動が吟味され軌道の弯曲が認められたが，両光点が互に一点に収束，または一点から離散する場合には総じて‘像—網膜系’の視覚機能，または運動光点相互の動力学的過程に記述を求めることができるが，各光点が互に逆向きに進む運動では個々に適切な記述系を選ばざるを得ないことが示される（実験4）．次に3光点，4光点の運動軌道の変容が検討されたが，各光点が同時に等速度で同方向に運動する場合（等速度条件），一点に収束，または一点から発散する場合（等速度勾配条件）には光点群は単一体として運動し（単一移動

態)，何れかの光点が残余の光点と異る方向に運動するときには顕著な部分運動と比較的不明確な全体運動とに分裂して知覚される(分裂移動態)．分裂移動態で水平に配列された光点群の両端の光点が同方向に運動するとそれらが枠組みとなって静止し中間の光点が著しい部分運動をます．それらが異方向に運動すると同一または類似の方向をとる運動光点がまとまって幾つかの部分運動が知覚される(実験5)．両端に位置する運動光点の枠組みの機能をさらに吟味するため，水平に運動する光点を挟んで上下に水平，垂直，斜方向の何れかの条件で一対の運動光点を附加提示し，種々な周期で正絃運動を往復した．結果は附加運動により包囲関係の配置がなされていても周期ある限界を越えると枠組みの効果が生じないこと，また，それらが運動方向によっても異なることを示した(実験6)．

単一移動態の知覚では'像—網膜系'による像自体内部の変位を記述する視覚機能が，分裂移動態の知覚では部分運動や枠組みの成立を記述する運動対象間または視空間の動力学的過程が記述の基準となることが述べられている．

第4章では実験結果を通して記述系との関係が従来の運動視研究との照合を含めて改めて総括されるが，相対的移動の知覚では運動対象の個数が増加するに従って視空間の動力学的過程に記述の基礎が置かれ，絶対的移動の知覚では'眼—頭部系'の視覚機能が記述の基準となることが論じられている．

本研究の成果は1）従来，単一対象と複数対象の視的運動軌道の研究がそれぞれ異った条件下で実験され，比較を難しくていたのに対し，これを同一条件下で組織的に実験し，実際運動の軌道視の面で絶対的移動の知覚と相対的移動の知覚とを関連づけている．2）絶対的移動の知覚では運動軌道の変容が空間的条件よりも時間的条件に一層，依存することを確め，その際，凝視追跡下の定位判断の時間的経過が生理過程の知覚と一致し得ることを示唆している．3）相対的移動の知覚では運動対象の個数，運動方向，速度，周期に関する条件を詳細に検討し，従来の実験結果との照合がなされているが，それぞれの条件下の結果について記述系の範囲と限界を指摘している．

実験は実際運動の軌道視を総て明にしたものではなく，それぞれの結果を記述する系間の関連を明確に系統づけたとはいえないが，上述の成果は実際運動の軌道視の研究の状況からみて評価されるものである．

本論文によって著者は文学博士の称号を授与されるに値するものと認める．

博　士（甲）

文学博士

第479号　佐藤　方哉　昭和51年9月24日

「オペラント条件づけにおける刺激性制御の問題」

論文審査担当者

主　査	慶応義塾大学部教授 社会学研究科委員	文学博士	小川　隆
副　査	同	同	印東太郎
〃	東京大学教授慶応義塾大学大学院 社会学研究科講師	文学博士	八木　冕

論文審査の要旨

本論文はオペラント条件づけにおける刺激性制御の問題という表題の下にⅠ問題，Ⅱ実験，Ⅲ論議の三部から構成されている．

Ⅰ問題では伝統的学習心理学で扱われていた刺激の般化と弁別という二つの側面が実験的行動分析の視点からのオペラント条件づけにおいて刺激性制御という概念によって統一的に記述されることが論じられる．近来，主としてデンショバトを用いた動物実験の分野で，この視点からの研究は 1)単一刺激訓練後般化勾配 2)継時弁別訓練後般化勾配の頂点移動 3)抑制性制御 4)冗長な手がかり場面での注意 5)行動対比 6)無誤反応継時弁別の六つの課題を中心に進められたが，これらの領域での研究成果は学習の代表的連合論であったHull-Spenceの理論の改訂を必至としたにも拘らず，興奮・抑制というそこで用いられていた連合論的概念が現在も使用されている点が指摘される．続いて，オペラント条件づけ，殊にフリーオペラントによる動物実験の本来の問題提起が連合論と認知論の対立を止揚する意図にたつものであったとし，刺激性制御に関する諸研究の成果を操作的に関連づけるため，従来の研究で欠落していた部分を明確にし，これを埋めるべくの実験が計画された所似が述べられる．

Ⅱ実験ではデンショバトにおける色光次元を主とした刺激性制御に関する四つの実験が報告される．

実験1では，単一刺激訓練後，テスト刺激を無作為に提示する標準的消去手続ではなく，訓練刺激を次第に近